

## 近代曹洞宗史における石川素童禅師の功績

著者	川口 高風
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	25
ページ	5-18
発行年	2020-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1646/00000856/">http://id.nii.ac.jp/1646/00000856/</a>

## 近代曹洞宗史における石川素童禅師の功績

愛知学院大学名誉教授 川口 高風

### (1) 名古屋の寺院数

名古屋から来ました愛知学院大学の川口です。改めて、こんにちは。これから一時間ほどお話しさせていただきます。石川素童禅師が愛知県の出身であること、明治期の曹洞宗の研究を少し行なっている者ということから、私に依頼が来たかと思います。本来ならば、もっと適任の先生がいらっしゃったと思います。恐縮ですが私が引き受けさせていただき、少しお話をしたいと思います。

今日お話しします内容ですが、第一に石川禅師が生まれ育った、愛知・尾張・名古屋の仏教について、そして石川禅師の伝記をみて、石川禅師が何をなさったか、そして、また、その功績を眺めてみようと思います。

まず、名古屋の仏教のことをお話ししようと思ひまして、こんな資料を作りました。名古屋は愛知県の県庁所在地であります、その特徴といえそうですね、全国一、お寺が多い所です。寺院は4585ヶ寺あり、全国一位で、次に大阪府の3301、兵庫県の3214、滋賀県の3075、京都府の3026と続きます。ちなみに、神社の数は363社で、全国第4位だそうです。したがって、愛知県には、全国寺院数では75911ヶ寺ある内の、七分程度

が愛知県にあることになります。次に愛知県内を分類してみますと、一番多いのは名古屋です。資料では1012ヶ寺となっています。約4500ヶ寺のうちの約1000ヶ寺が名古屋を中心にあるということになります。それがだんだんと、寺院の統廃合が行われ、最近では983ヶ寺だそうです。しかし、アバウトでいえば1000ヶ寺ということだと思います。

そして二番目が自動車で有名な豊田市。三番目が、家康が居城した岡崎城のある岡崎、それに続いて一宮、西尾、豊橋、豊川となっておりますが、一番は何といっても名古屋ですね。名古屋の区ごとにみてみますと、一番多いのは中区の125ヶ寺です。1000ヶ寺のうちの一割が存在しています。続いて中川区、中村区となりますが、名古屋は家康が九男の義直のために新しく作った町です。そのため、織田家の居城であった清須の町より移ってきた寺院が多いことも一つの特徴です。

## (2) 名古屋寺院の宗派

次に、宗派を見てみますと、天台宗が29ヶ寺、高野山真言宗など各宗派があります。真宗大谷派は279ヶ寺、曹洞宗は227ヶ寺であるため、1000ヶ寺のうち、真宗大谷派と曹洞宗で約半分の500ヶ寺を占めているという特徴もあります。したがって、残ったあとの500ヶ寺を他の宗派で構成していることとなります。尾張門徒といまして真宗大谷派の多いことは、真宗所であり、信仰の篤いところでもあります。東別院もございます。その真宗に曹洞宗がついていった感じにも受けとれるのです。

## (3) 名古屋寺院の歴史的・地理的配置

次に、歴史的な配置から寺院をながめてみますと、江戸初期の慶長頃に、織田信長の居城していた清須から名古屋

に城を作る時、つまり、清須越しの寺院、それから、それまで名古屋にあった寺院、それから清須以外の地から移ってきた寺院、それから慶長遷府後に造営された寺院、慶長遷府後に復興された寺院というように、5つの分類ができます。さらに、地理的配置からながめてみますと、名古屋に通ずる東西南北四方の街道の関門として配置された寺院があります。どういうことかといいますと、東の北側だと木曾街道、それこそ信州へと通ずる街道、西の方は東海道から来て美濃路に通ずる美濃街道、南の方だと東海道、それから西の南側には姫街道があります。つまりその街道の要所ごとに大きな寺院があるのです。どういうことかといいますと、東西南北四方より名古屋に攻めてきた者に対し、どうするかという対策です。つまり、それを防ぐことの砦を考えたのです。もちろんこれは曹洞宗寺院だけではなく、全ての宗派にわたります。お寺の本堂や庫裏などの天井は高いでしょ、それはどうしてかという、弓を射るときに天井が高くないと弓が射れないというところから庫裏のほうも天井を高くしたともいわれています。したがって、大きな梁でもって天井も高くしているのです。

二番目として、集団的に配置された寺院です。これは一つの寺町なのです。例えば、その一つの筋にお寺を集める。曹洞宗なら曹洞宗を一つの筋道に集める。これを禅寺町といいます。また、日蓮宗なら日蓮宗を集めるのです。それを法華寺町というのです。それこそ10ヶ寺、15ヶ寺または20ヶ寺が固められて寺町のできたのが名古屋市内の東区と中区にあります。それから三番目として、町を整備するために配置された寺院、これは区画整理によってできた空間に、つまり、間所に集会所のような小さなお堂、説教所というようなものを作り、それが発展して寺院になったという例です。

#### (4) 名古屋寺院の多い理由

次に、名古屋に寺院の多い理由ですが、こじつけも少しありますけれど、愛知県全体で考えてみますと、古代から

愛知県下には大きな神社が多いことです。それは宗教信仰が盛んな地であったと考えられるのです。例えば、熱田神宮をはじめ、津島神社、国府宮神社、真清田神社、猿投神社、拳母神社、知立神社、吉田神社、砥鹿神社などがあり、氏神信仰や豊作を祈願するなどの宗教行事によって、自然と宗教への信仰が盛んになっていったのです。その背景から寺院も多くできたのではないかと。

二番目、尾張は濃尾平野の肥沃な丘陵地を背景に経済的な基盤が安定した所です。なぜかというと、濃尾平野の肥沃な地に大きな河川に囲まれ、広い平野が多いためです。農業が盛んとなり自然と多くの作物が採れるのです。稲作地帯であり経済的にも豊かになるのです。

三番目は戦国時代には信長や秀吉、家康が出て全国統一に向けて多くの戦乱を体験したため、戦国期のような苦しみを繰り返したくないとの民衆の願いから仏教信仰が篤くなったとも考えられるのです。尾張では「一人出家すれば九族天に生ず」といわれています。九族とは高祖父、曾祖父、祖父、父、自分、子、孫、曾孫、玄孫の総称で、一人出家の福徳は九族に及ぶという篤い信仰心があつたのです。したがって、名古屋出身のお坊さんは多く、大商家から出家した人が多かった。一人出家すれば、その家が繁盛するということでした。

少し余談ですが、尾張の出身で黄泉無著という、江戸時代の学僧がいます。この方の出身は江崎家といって、酒や醤油を売ったりしている酒造業でした。その黄泉さんが、兄弟の中で一番頭が良く、そのため出家させられたといわれています。晩年に長崎の皓台寺のご住職様になっていますけれども、長崎は外国との貿易が許されているところであり、外国の情報が、一番早く知ることができる地でした。そこで、黄泉は中国の商人より普通の醤油ではなくて、白醤油を教わるのです。黄泉はそれを生家の江崎家に話し、江崎家でそれを作って販売したところ、大繁盛したといわれております。尾張は、大根と坊さんの名産地とまで言われました。大根はなにかというと、普通の太い大根ではなくて、守口漬に使っている、細くて長い、宮重大根というものです。それがいっぱい取れたのです。そして

坊さんもたくさんおったと。江戸期には多くの叢林がありました。雲水の修行道場のことです。明治期になると認可僧堂、それから専門僧堂というように多くの雲水が修行する僧堂がたくさんありました。

四番目として考えられるのは、地理的には江戸、上方の東西文化交流の接点として、文化人の往来が頻繁であったことです。そこでオリジナル文化を作るため、当時の文化人であった僧侶の育成に力を入れた。また、県内には城下町が多くあります。名古屋を筆頭に、豊田、岡崎、豊橋などに城があり、城を防衛する砦として集められた寺院の寺町ができたためであります。以上のことが名古屋にお寺の多い理由ではないかなとも考えています。

さて、明治以後ですけれども、両本山の貫首に就いた方をながめてみますと、永平寺では、森田悟由禅師、熊澤泰禅師、佐藤泰舜禅師、それに現住の福山諦法禅師です。總持寺では、独住一世である諸嶽奕堂禅師、石川素童禅師、杉本道山禅師、福山界珠禅師、熊澤泰禅師、成田芳髓禅師、独住二十五世で現住の江川辰三禅師が愛知県の出身です。總持寺を見る限り、明治以後の独住禅師二十五人のうちの八人が愛知県出身ということなのです。これは特記すべきことであります。

したがって、愛知県の中心地である名古屋は、信仰の篤いところですから、何かオリジナルの特色を強く感じます。最近、名古屋メシとかいっていますが、「きしめん」とか、うなぎを千切りにして、それをお茶漬けにして食べる「ひつまぶし」、それから味噌味の「味噌うどん」とかが出ています。それからもう少し、私もそうですが、アクセントが強いのではないかと思います、名古屋弁のイントネーションが、ちよつと高く感じます。また、言葉が汚いとも言われます。老人の会話を聞いていると、例えばあなたのことを「おみやあさん」といい、「おまえさん」ではなくて、「まえ」が「み」になるのですね。そうすると、猫が鳴いているようだといわれ、「おみやあさん」、みゃーみゃーみゃーみゃーと言っているといわれます。私は石川禅師も名古屋弁で喋っていたのではないかと思っています。当然、生まれ育ったところだからです。石川禅師も、「きしめん」を食べながら、「おみやあさん」と名古屋弁で喋り、

説教法話などを行なつて接化していたのではないかと考えられるのです。

### (5) 石川禅師の略年表

さて、名古屋のお話をしましたけれども、次に石川禅師の略年表を、『曹洞宗全書』の年表から拾ってみました。この後、尾崎先生、菅原先生もレジュメを作られ、伝記などを発表されますが、私は『曹洞宗全書』によつて略年表を作ってみました。それは『曹洞宗全書』をみますと、その記事の下に出典が書いてあります。例えば、天保十二年の十二月一日に石川素童禅師が生まれることが「大圓玄致禅師小傳」とか、「行状」などというように出典資料が記されています。それが『曹洞宗全書』の特徴ともいえます。

ただし、石川禅師の略伝が元治元年（1864）から、次は明治十三年に飛びます。『曹洞宗全書』で見る限りは、その間のこと、例えば、住職したことなどがあげられていませんが、その間がどうして抜けているのかと思つたのです。明治十一年九月に、永平寺で二祖懷辨禅師六百回大遠忌に随侍していることが年表にはないのです。次に、伝記資料の出典の一つとして「一、明治十一年九月二大尊遠諱賞勲簿 永平寺蔵」があります。これは今から四十年ほど前の永平寺二祖国師七百回大遠忌の時に、私は少しばかり永平寺の資料を見させてもらいました。この「賞勲簿」によりますと、配役人員として、教授師鼎三、引請師肩庵、説教師柏巖……とあります。次に監院寮として監院及び賞勲長として良範、補助として戒鱗、絶三、素童、禅隆と続いております。教授師を務めた鼎三が私のお寺の二十八世住職であり、教授師として活躍なさっていたのです。また、当時は永平寺の西堂だったと思うのですが、二祖懷辨禅師顕彰に努めた鼎三を何とか世に紹介すべきでないかと先輩にいわれ、そんなところから鼎三の研究を行なったのです。

この「賞勲簿」は永平寺にあり、監院寮に中書記兼賞勲係として素童というのがありました。初めはわからなかつ

たです。これが石川素童であることを。しかし、これは名古屋の石川素童だよと先輩に教わりまして、どうして石川素童禅師が若かりし頃に永平寺にいたのか不明でした。それは当時の永平寺の監院は良範とあり、この方が長森良範といまして、彦根の清涼寺の住職で番打良範と称されるほど厳しい人だったようです。警策をバンバンと打った人でした。そういう方に、石川禅師は随侍していたのです。

その随身した長森良範が監院であったため、二祖国師の大遠忌があるから、お前も来いということで随喜していたでしょう。「賞勲簿」の上に筆の頭に朱肉をつけて、ポンと上に押すのです。わかりますか？ これは、賞勲として例えば緒子（安陀衣）を差し上げた時、袈裟を差し上げ時に、ポンポンと押しています。そうした文書が残っております。石川禅師は、事務的なことをやっていたのですね。

石川禅師は、若かりし頃、出身地の名古屋の東区の大曾根に閑貞寺がありますが、その授戒会に、鼎三が戒師で来ていました。当時は九歳だったということですから、両親について行ったでしょう。そこで鼎三さんは御授戒の血脈をいただいたりして、仏教に対する信仰を篤くしていったと思われます。二祖国師大遠忌には鼎三がいらっしゃる、随侍した長森良範もいるところから、この遠忌行事に参加して大変に喜んだことと思われます。

しかし、ただ随侍してただけかと思ったら、そうではないのです。その遠忌に、鼎三が懷辨禅師の『光明蔵三昧』という著作を校訂して永平寺僧堂版として出版しているのです。その事務的なこと、刊行するまでの事務書類を石川禅師が書いているのです。それが永平寺に残っております。光明蔵三昧の彫刻に関すること、刊行にかかるお金のこと、何部を発行するかなど、石川禅師の書いた事務的書類などは全部がそこにありました。石川禅師は仏縁を大切にしているのだと私は感じました。



## (6) 總持寺の分離独立問題

さて、明治十三年以後、同二十五年には總持寺の分離独立問題というのがあります。実はその前の同十七年に、禪師は總持寺の監院さんになります。しかし、ここで分離独立問題が起きます。これはいろいろな要因があるのですけれども、私は永平寺での調査において、永平寺にある資料によったのですが、その時に總持寺の能登の祖院にも分離資料があるということをお伺いして、能登の祖院にも行きました。そうしたら、そこには箱があつて分離資料がたくさんあり、びつくりしました。祖院は火災で燃えて何もないのだという推測ばかりしていましたが、存在することが確認できて、大変嬉しく思いました。そこで少しく、分離独立問題について調べてみたのです。

それに関する資料が「總持寺分離独立問題」という項目です。どうして總持寺が曹洞宗より分離独立するのかというところで、勿論石川禪師は監院であるけれども、かなり政治的な強い方に誘導されたようでした。永平寺の調査において、これに関する文書がいっぱいあった覚えがあります。便箋の野の用紙の真ん中の折込の所に、総本山と書いたものがありました。これは永平寺が臥雲禪師の時に、総本山論を唱え、永平寺を総本山、總持寺を大本山というようにしようとする意図があつたからでした。そのため総本山とある野の用紙をその調査の時にいっぱい見ました。ただし、それは使われなかったようですね。

それに関する問題の著作は、足立普明の『足立普明意見書』、金山貫苗の『曹洞宗時事小言』とかがあります。また、安達達淳の『能山独立曹洞革新論』、これには分離独立する理由が多く載っています。見るからに生々しい意見であります。私は若い大学院時代に明治の両山分離問題は研究するなど、ある先輩の方から言われたことがあります。それはタブーだと。両山分離の事は、いうものではなく、そのためタブー視されていました。私はその研究をしないと、近代曹洞宗の歴史は明らかにならないと思ひまして、少しく、両山分離問題以前のことを一生懸命やって

みて、それからやろうと思っていたのですが、大分年齢もとリ、やれるかどうかなくなりました。そこで、この安達達淳の『能山独立曹洞革新論』と大辻是山の『両山は分離すべからず』の二冊が總持寺の立場、それから永平寺の立場を表す良い資料と思われれます。

また、岡田泰明の『曹洞宗問題意見書』や『曹洞宗大本山總持寺史論』というのがあります。今、私はこうやって両山の立場を主張する著作を刊行順に並べましたけれども、その主張を対照しながらやっていると、本当に生々しくなります。さらに雑誌での討論も多くなりました。それは、分離派の「第一義」、「活波瀾」、「新世界」、「能嶽教報」が總持寺系の意見。非分離派として、『洞上真報』、『扶宗会雑誌』、『曹洞宗正義』、『教海指針』、『如是』で、交戦するのですね。

この当時、明治二十五、二十六年くらいには、国会にまでとりあげられて、当時内務大臣、そして大蔵大臣も務められた井上馨が仲介に入って、両山が和合したのですね。そのためかといわれていますが、永平寺東京別院の長谷寺に井上馨さんの立派な墓があるのは、その両山分離を防いでくれたところから井上馨を祀るようになったといわれています。

年表の分離独立問題についての出典を見ますと、『明教新誌』がほとんどです。通仏教の仏教新聞です、これをみると、少し生々しいですが、すぐく石川禅師の行動がわかります。結果的には明治二十八年に峨山禅師の法嗣二十五人に合わせて洞門現時二十五哲として、總持寺の分離独立運動をした二十五名を讃える本が水野靈牛という人が著しています。もちろんそのトップは石川禅師になっている。では、石川禅師は何をしたか、名目上は独立する立場でありましたが、結果的には分離しなくてよかったと思います。

それが終わると、明治三十一年には、總持寺が火災に遭うわけです。そして、どうするか。当時の石川監院は大変だったと思います。石川監院は東京の豪徳寺、神奈川の大雄山最乗寺にも住職しております。続いて、總持寺の貫首

となります。貫首になったけれども、まだ焼けたままであります。そこで、復興するにあたり、明治三十九年のところにあります、總持寺の鶴見への移転であります。

### (7) 總持寺の鶴見への移転

總持寺の鶴見移転については、資料として「兩本山非移転事件顛末」というのがあります。これは現在、例の門前町の所有だそうですが、私は佃和雄先生という民俗、歴史学の専門の方からお聞きしていましたが、この顛末記も生々しいです。また、祖院にあります啓沃書、それから近年発見されました、横浜の建功寺の枅野宏道老師の書いた日記の『驢事馬事』というものもございます。そこで、「兩本山非移転事件顛末」の目次だけをちょっとここに挙げてみました。

どういふことかといいますと、總持寺を鶴見へ移すかどうかということで、賛成か反対かという「一、起因」、「二、兩本山非移転同盟倶楽部ノ設置」、続いて「石川師ノ帰山」「会见」……とあり、このように目次にはあります。それこそ石川禪師が暴漢に襲われて命を失いそうなのもあつたこともよく載っております。幸いにもそのようなことにならずに来ました。細かなことは尾崎先生にやっていただきますが、これで、石川禪師は能登から鶴見へ移ることの船頭取りになりました。また、同時に、祖院を残すということで、祖院の復興、祖院の再建をはかりました。本山が鶴見へ移ることになり、祖院をどうするかという問題が出たため、祖院を別院という形にするのです。總持寺の別院。曹洞宗というのは絶えず永平寺と總持寺の騒動でフィフティフィティとなっています。そこでどうしたかといいますと、永平寺系は先ほど言いました東京麻布にある長谷寺を永平寺東京別院として、總持寺は別院の祖院としたのです。けれども、呼ぶ時には別院と呼ぶのではなく祖院と呼んだのです。別院の成立もそのような理由があります。

鶴見へ移転する時、やはり名古屋で建物の刻みが行われています。ここにある写真は仏殿の起工式のもので、名古屋

屋の万松寺で起工式を行いました。左側には明治四十一年九月二日に撮影された名古屋の熱田の白鳥にある仏殿作事場です。この仏殿の作事場の白鳥というところは私の住職地の法持寺境内にこのような作事場が出来ていたのではないかと思いますが、場所の特定についてはまだ詳しくわかりません。

それはどういうことかといえますと、法持寺のすぐそばに白鳥貯木場があり、木曾の檜などを木曾川を通じて、伊勢湾に流しそれを堀川を通して名古屋城まで運ぶ、この堀川を通る途中に貯木場があつて、そのすぐ横に木造り作事場があつたものと思われましたが、それ以上の詳しい事はわかりません。何れにしても、名古屋で仏殿の木造りは行われたのです。そして、名古屋港から海で運んで横浜まで運ばれたと私は聞いております。では、どうして名古屋でこうしたことが行われたかというところ永平寺でもそうですが、本山に近くの経済的に豊かな地というところから、名古屋になったという気はいたします。もちろん、石川禅師の出身地ということもありますが、永平寺でもかなり名古屋からの財閥、大商家が色々なことで援助している。總持寺は東京が近いですが、経済面はともかく、信仰面では名古屋の方が篤かったことから思われます。今、仏殿の作事場が私の住職している法持寺の境内地ではなかったかといいましたのは、法持寺三十二世の明達慧等という方が、石川禅師の随行長などを務めていたことから考えられるのです。なお、「總持寺と近代禅僧」というタイトルで、駒澤大学の禅文化歴史博物館から出版された図録があり、その四十二頁にその時の石川禅師の労苦が載っております。

#### (8) 石川禅師の著書と弟子

禅師には多くの著書がございます。自著かどうかはわかりませんが、高橋竹迷さんによって禅師の御垂示や教誨、法話が編集されたものであります。『大本山總持寺御由来抄』は禅師御自身の著作ということですが、畔上樸仙禅師の著述かもしれません。

『大圓玄致禪師語録』は、お弟子の稲寸篤恭、山田奕鳳らによつて編纂され、『伝光録白字弁』は石川禅師の提唱、御垂示したものを侍者が筆録し、新井石禅師が補筆して刊行されています。その他、『夜明簾』『戒会指南記』がありますが、大正四年に鴻盟社より刊行された『獅子吼』は、好評によつて同十一月に『現代と修養』と改題して再版されています。また、『法華経』の寿量品や安樂品に石川禅師が訓点を付した経本も刊行されています。

次にお弟子をみますと、先に出了した稲寸篤恭を始め、三川啓明、大野囲山、山田奕鳳、小出牧宗、渡辺弁宗、石川素禅がありますが、石川大玄師の「禅の人間像——石川素童——」によりますと、当時は七人の侍といわれていたようであります。それ以外にもいらつしやると思つて、『曹洞宗全書』の大系譜をみると、大石明道、三浦素啓、丹下專證らの名がありました。弟子たちのよいところは、いい孫弟子、曾孫弟子らを育成したことであり、禅師号の大圓玄致禅師から大圓会という法孫の会ができています。やはりそれは石川禅師の人徳ではないかと思われまふ。つまり、弟子と共にその法孫が繁栄することが、一番の喜ばしいことであると思ひます。

#### (9) 石川禅師と縁者

縁者として明達慧等と新井石禅の二人の名前を挙げさせていただきました。明達慧等というのは後に苗字を山田と改姓しますけれども、私の住職している法持寺の三十二世住職です。白鳥鼎三の孫弟子にあたる方ですね。この方は石川禅師の随行長とか特選議員、宗務顧問所の顧問とか、いろいろな役を務めております。石川禅師が鶴見の總持寺での入仏式だったでしたか、その時の写真が絵葉書になっております。それを見ると先導師といつたらいいのでしょうか、石川禅師の前を先導している写真がありました。私はびっくりしました。どういふことかといひますと、法持寺は白鳥鼎三を始め、弟子であり法持寺二十九世の鷹林冷生、弟弟子で三十世の大島天珠と続き、鼎三は永平寺の西堂、冷生は永平寺の後堂から監院を務めています。永平寺監院時代は貫首が森田悟由禅師であり、両山分離問題があ

った時です。また、弟弟子の大島天珠も永平寺後堂でした。つまり、バリバリの永平寺系ですね。それが、大島天珠の弟子の明達慧等は、急に總持寺側に近くなっていました。これは石川禅師の魅力といたらいいのでしょうか。石川禅師によって總持寺との縁が深くなったのですね。

もう一人は新井石禅禅師です。總持寺の禅師になられた方ですが、かつては永平寺貫首の森田悟由禅師の随行長、永平寺の副監院、曹洞宗宗務院の教学部長、名古屋の護国院住職に就いています。護国院とは今の永平寺名古屋別院ですね。護国院住職時代まではバリバリの永平寺系であり、将来は永平寺の禅師になれるのではないかといわれていた方でした。護国院の住職になったのが大正四年七月で、護国院を認可僧堂にして開山しているのです。ところが、その翌年の大正五年五月に大雄山最乗寺の織田雪巖老師が遷化されたため、突如として、最乗寺の住職に新井石禅が推挙されたのです。護国院住職になって一年もたたないうちに拔擢されたのです。それは石川禅師によるものでした。それこそ引き抜きともいわれました。さらに石川禅師が遷化された後の總持寺の貫首にもなっているのです。この人事にはびっくりしました。つまり、永平寺系にいた新井石禅を、人物本位ということで總持寺系にしたのです。現在の名古屋は大体五分五分に寺院の政治的系統を分けているようです。伽藍法で見ると、バリバリの永平寺系の法統としても、人法はほとんど總持寺系です。しかし、政治的にはフイフイフイに調整しているようです。それは石川禅師がかなり永平寺系の寺院を總持寺系にしたからでしょう。まさに明達慧等、新井石禅はその代表的な方とされます。当時、新井石禅は悩んでいたようであります。『新井石禅全集』がありますが、その中に、最乗寺住職に推挙された時、宗門のために自分は最乗寺へ行くと。それを聞いた、永平寺系の弘津説三は驚嘆しましたが、永平寺系の方々に根回しして、新井石禅の最乗寺転住をスムーズに押し進めたのです。その他にも、こういう方がいらっしやるかもしれませんが、ここに代表的な方をとりあげてみました。

## (10) 石川禅師の伝記資料

伝記資料として、ベースになったのは「大圓玄致禅師行実」です。これは語録に入っています。そして石川大玄師の「禅の人間像―石川素童―」、それから駒澤大学禅文化博物館より発行された『總持寺と近代禅僧』、また、『跳龍』に平成二十八年五月から連載されていました桂川道雄師の「石川素童禅師の大いなる足音」、これらが石川禅師の行実を中心に述べられており、やさしくまとまっているものと思われます。さらに、令和元年三月六日号の「中外日報」で圭室文雄先生が、「百回忌を迎えるにあたって」と題して石川禅師のことや、總持寺の移転の事などについても書かれていました。このような論文はその他にもあるかと思われますが、禅師の評価を見ると、神通力をもった人物であるともいわれています。両山分離問題、總持寺の鶴見への移転、さらに祖院の復興などと、いったい大きな仕事をなさった方があります。

以上、私は少し裏面史的なことからなってみました。そのため、少し生々しい話が出ましたが、御寛恕ください。偉大なる人物であると同時に、細かなことにも、気配りのあつたスケールの大きい人物ではないかとも思われました。拙い話でありましたが、これで私の話を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。